

昭和三十八年七月二十三日 第三種郵便物認可  
（毎月一回・十五日発行）

（通第一六九号）

# 慈

# 光

第十五卷

第五号

「教行信証」講話	近角常観	(1)
△信楽釈(一)		
歎異鈔第三章	花田正夫	(9)

目 堂の鈴(十二)	佐藤強三郎	(11)
-----------	-------	------

一道会の記(続)	榊原徳草	(18)
----------	------	------



「教行信証」

講話

近角常観

『信樂釈』

(一)

(専修念仏の意義)

今席より信樂釈に移ることに致します。

『次に信樂と言うは、則ち是れ如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。この故に疑蓋間雜あることなし。故に信樂と名く。即ち利他廻向の至心を以て信樂の体と爲るなり。然るに無始従り已來。一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈没し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂無く、法爾として眞実の信樂無し。是を以て無上の功德値遇し難く、最勝の淨信獲得し難し。一切凡小、一切時の中に、貪愛之心常に能く善心を汚し、瞋憎之心常に能く法財を焼く。急作急修して頭燃を灸が如くすれども衆て雜毒雜修之善と名け、亦虚仮諂偽之行と名く、眞実の業と名けざるなり。此の虚假雜毒之善を以て、無量光明に生ぜんと欲す。これ必ず不可なり。何を以ての故に。正しく如来、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、乃至一念一刹那も疑蓋雜わること無きによりてなりこの心は即ち如来の大悲

奴が、其の広大のおまことを頂けるのが、仏のおまことであります。

処でそのまこと／＼という、その仏のおまこととは何か、となるに、即ち今言う、仏のおまことは、このまこととの者を飽くまでお見捨て無き広大の大慈悲とより云いようが無い事となる。

故に今席の処には先ずお示し下されて

『次に信樂と言うは、則ち是れ如来の満足大悲、円融無碍の信心海なり。この故に疑蓋間雜あること無し。故に信樂と名く』

と。抑々今言う如く、まことというは此方より何程疑い隔てても、其の者を飽くまで見捨てず、飽くまで哀れと思召し、飽くまでまことに向つて下さる遣る瀬無き仏のお慈悲というより外は無い。故にそのまことの、も一つ訳をいう時は、この遣る瀬なきお慈悲と言わなくては、まことの訳は分らぬのである。即ち今、信樂とは、その遣る瀬なき大悲とお示し下されたのであります。即ち『信樂と言うは、則ちこれ如来の満足大悲円融無碍の信心なり』である。如来の満足大悲とは、如来の大悲は一分一厘欠け目無く、飽くまでこの者に善くなし下され、如何なる悪しき者をもお見捨てなき広大のお慈悲故に、満足大悲である。この満足大悲ということは、唯仏のみに言える事にて、等覺、補処

心なるが故に、必ず報土の正定之因と成る。如来苦惱の群生海を悲憐して、無碍広大の淨心を以て、諸有海に廻施したまえり。これを利他眞実の信心と名く。』

詳しいことは次席に申述べることとして、これまでの処は、至心の仏のおまことに就きお話したのであります。即ち前々席来お話する処の仏のおまことであります。その仏のおまことは、即ち我々まことならざる者を飽くまでお見捨て無きまことであります。世間の上でも「うそ」を言わず、偽りを語らず、人に親切なるだけがまことでは無い、まことならざる者に飽くまでまことにし、遂にはその者にまことが貫徹するまでまことにするが、眞のまことである。遂にそのためまことの者が頭が下り、まことになるまでまことにするのであります。

今仏のおまことは、我々が悪いばかりに、仏この者に長々まことになし下され、遂にそのためにこの強剛難化の弥勒菩薩と雖も、満足大悲とは言われぬのであります。

又円融というは、その者を飽くまで円ろく融かして下さるお慈悲であり、無碍というは、この者に更に障りなく無碍にして下さるのである。其の広大の満足大悲円融無碍の信心のお心故に、疑いというものは微塵と雖も間雜して居る事は無い。故にこのお心を信樂と名くとお示し下されたのである。

又次に

『即ち利他廻向の至心を以て、信樂の体と爲るなり』

こは至心の処にお示し下される如く、至心のまことは、南無阿弥陀仏の至徳の尊号を以て体とする。その長々の至心の仏のまことは、如何なる者をも見捨てぬというあなたの慈悲である。故にこのたびは、其のあなたの信樂のお慈悲は、至心のまことを以て、其の体とする。即ちその至心のまことが体となりて、その至心がどう現われるか、というに、どの様な者でも見捨てぬとの大悲の信樂が、即ち其の仏のまことの働きである。故に南無阿弥陀仏は至心の仏のまことの体にて、そのまことがこのたびは信樂のお慈悲の体となるのである。これは例の親の一枚の手織りの着物とは、即ち親のまことである。その親のまことは、その汗だらけの乱暴者の子供に着せたいとの親の慈悲心の外に無い事と、なる。則ち親のまことの体はこの手織りの着物に



て、この手織りを離れて親のまことは無く、其のまことは、そのして見よう無き汗たらしの乱暴者の為に、此の手織りを着せて遣り度いと、遣る瀬なき親の心に外ならぬのである。即ち信樂のお慈悲の体、至心のおまこととなるのであります。

○  
そこで前々席に引き続き、再び繰り返す親の手織りのたとえであります。今これをお話するのは、仏のまこと、お慈悲の遣る瀬なき処を聞かされると、何人もその広大なまことを信ぜず居られなくなるからであります。

前々席に於いて、仏が五劫の思惟、永劫の修行に於いて、南無阿弥陀仏の一つを選び取り、御成就下された事を、親が手織りを織り上げ、仕立て上げて下されたに喩えたのである。即ち仏が諸仏二百一十億の浄土の有様を御覧下され、その諸仏浄土の往生の行の中より、南無阿弥陀仏の一行を選び取り、これを御成就下された事を、親が乱暴者の汗かきの子供の為に、数ある種類の着物を皆斥け、その者の為に、わざわざ一枚の手織りの着物を造り上げ、これをその子供に与えて下さるに喩えるのであります。

それを今一度丁寧に申すならば、親が子供の為に数ある絹類や華美なる着物を皆拵び捨て、わざわざその者のために苦勞して、手織りの着物を作り上げて下されたは何故で

仰せられたは、何故であるか。外の道が出来ぬ為に、その者を助けると御成就下された南無阿弥陀仏の六字なれば、この六字は、我々坐禅戒行の出来ぬ者、菩提心の起せぬ者、孝養父母、奉事師長の出来ぬ者、菩提心の起せぬ者、六字である。故に我々五逆十惡、具諸不善の輩に於いては外のものはいらぬ。唯南無阿弥陀仏の一つであるとお示し下されたが、法然聖人の専修念仏の御教化なのである。遂にそのため、其頃の聖道問の人の立場よりは外道と見られ、法然聖人、親鸞聖人を始め、流罪の厄にお遇いなさるに至つたのであります。

それは何故であるか。若し法然聖人が「坐禅したい者は坐禅をして念仏を申せ、修行をしたい者は修行をしつつ念仏を称えよ。真言、天台を修したい者は、真言天台を行しつつ念仏をなせ」と仰せられたのなら、流罪の厄にお遇いなさる事はなかつたのである。何故なれば、たゞ念仏という事だけなら、その頃余宗にも随分あつたのである。叡山の慈覚大師など、入唐して念仏を修しなされた程なれば、唯念仏したとて、流罪になるといふ事は無い。

処が法然聖人の念仏は、専修念仏という事であつたのである。法然聖人の御教化は、天台や真言の立派な教法はあつても、極悪下劣の我々には、それではとても駄目である……御存じの如く、源信和尚の『往生要集』には初めから、

あるか。外の着物では皆よごし、破つて了うてして見よう無き奴である為に「その者が可哀想である。其の者に着させて助けるためには、もう親の手織りの外仕方が無」と、態々一枚の手織りを造り上げて下されたのである。即ち戒行の着物も破つてしまひ、坐禅の着物も引き裂いて仕舞い、修行の着物も汚がして仕舞うて見ようなき我々である。故にこれら修行の着物ではとても駄目故、その着物の着れぬ者に着せたいと、わざわざ仕立て上げ下された一枚の手織りの南無阿弥陀仏である。

故に親の手織りは、唯派出で無き、丈夫な着物というだけ無く、我々乱暴者の汗かきが着ていたまぬ堅牢な着物なのである。此の着物を作りて助けるとあるが、南無阿弥陀仏の一行で助けるとの弥陀の本願なのであります。

で、吾々がこの南無阿弥陀仏を頂いて、南無阿弥陀仏と称えるは、唯一応に南無阿弥陀仏を称えるのでは無い。外の道ではゆけぬから、この一枚の親の手織りを着るのである。

前々席にも申す如く、法然聖人が善導大師の「彼の仏の願に順ずるが故に」の御文をお読みなされ「阿弥陀仏の本願は、唯専修専念である、一心一向である、一心に専ら弥陀の名号を称するのである、唯南無阿弥陀仏だけである」と

『夫れば往生極樂の教行は濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か掃せざらんや。但し頭密の教法、その文一に非ず、事理の業因、その行これ多し。利智精進の人は未だ難しと為さず。予が如き頑魯の者、豈敢てせんや。この故に念仏の一門に依て、聊か経論の要文を集め、これを披き、これを修するに、覚り易く、行じ易し。云々』

「天台、真言の頭密の教法は有つても、予が如き頑魯の者には出来ぬからせぬ」と源信和尚が仰せられた故、「出来ぬからせぬ位の段じや無い。その出来ぬ事を仏かねて知ろし召して、その出来ぬ者を助くるとの弥陀の本願念仏で無いか」と、教えて下されたが、念仏の元祖、法然聖人の専修念仏の御教化である。その代り、他の自力聖道の立場の人からは異端と排せられ、遂に今言う流罪にお遭いなされたのであります。

○  
処が如何に他の立場より排責を受け、悪しきまに言われようが、この専修念仏の教法ばかりは、実にあなたの生命であり特色である。

御存じの如く、弥々そのため流罪と事きまり、御出かけなさろうとする時も、なお矢張り専修念仏をお勧め下されたのであります。其の時、御弟子信空上人に對せられての仰せは『古徳伝』の中に



「この念仏の為に流罪に遇うと雖も、決して汝等悲しむにあたらぬ。駅路は是れ昔より聖者の行く処である。支那に於いては一行の阿闍梨あしかり。日本に於いては彼の優婆塞うばさく。又支那に於いては白樂天、日本に在つては菅相吸。これ等の聖は皆、何れも配所に趣かれたのである。況んや末代愚癡うしやうの源空に於いてをやである。むしろかかる事無くんば、いつまでも帝てい幾きに止まりて変わる事あるまじきに、この時に当りて辺鄙へんびの群集を化益出来ること、これ実に莫大の利生である。但し痛む処は、源空興する浄土の法門は、濁世衆生の決定出離の要道故、これに仇をなす者に、定めて守護の天等の冥みやう職しやくを蒙らんか。すればこの度の源空が流罪、弟子の斬刑、かくの如き前代未聞、事常篇に絶えて居る。因果の空しからざること、生きて世に長らうる者は、必ず後に思い合すべきである」と仰せられ、更に、一人の門弟に對し、卒爾をも省みず一向專念の義を述べ給うたとある。即ち後に信空上人このお言葉を思い出し、果して間もなく承久の乱が起りて、上下を問はず、この事に関係あつた方々が皆配処にお出かけになる事になつた。これを見て信空上人

「先言たがわず、後生よろしく聞くべし云々」と言われたとあります。

斯く法然聖人にありては、既に自分が流罪と事きまろう

と仰せられたとあります。

実にこれ程までに尊き專修念仏である。故に真言なり、天台なり、頭密の行法を行じつつ念仏せよと言へば、世間的にはまことに都合よいのでありますけれども、それでは念仏の絶対なところが頂けぬ。故にここはどうかあつても、はつきり「きじめ」を立てて言わなくては居れぬのであります。

話が横道に入りますけれども、今日世間は大分宗教に心を懸けるようになり、今日では一般に宗教が大切であるところまでにはなつて来たのでありますけれども、なお宗教ならば、何の宗教でも結構であるとの説が行われ、甚だしきは宗教の根底はどの宗教でも一つである、とさえ言う学者があるのです。

併しそれではその宗師々々の各「きわ」を立てて主張する主張は無くなつて了い、殊に我々の信樂する、念仏成仏是眞宗の有難いとこはなくなつて仕舞うのである。私共、他力のお慈悲を聞く者に於いては、唯この念仏の仰せばかりが有難いのである。それは何も自分の教というところに力をいれ、力んで頑固に念仏ばかりというではない。實際自分が此のお慈悲を頂いて、自分如きこの浅聞しきして見ようなき者を救い給う念仏と頂く時は、余の教法は何程有る

が、此方は何処までも無碍の一道である。流罪が法然聖人には、更に障りにならぬ。むしろその自分を流罪に処して、この念仏の法門に妨げをした者が、冥衆みやうしゆんの冥職みやうしやくを受けると、却つてその人を氣の毒に思し召されたのである。

又この流罪にお遇いなされた事が却つて計らずも末世辺鄙へんびの衆生を御化益下さる事が出来た訳にて、この御流罪があればこそ、我々末世罪惡の者の救わるる教法が、普く行われ下されたのであります。

処がこの時、御弟子西阿と申す人が、聖人の袖を控えて「今日はその專修念仏のために流罪はお出けなさるうとするのである。しかるにこの際に、それをお説きなさるは如何のものか」と申上げた。すると平素優しき聖人が、この時ばかりは辞色はげしく

「汝、經文を見ずや」

と仰せられた。そこで西阿が

「成る程、經文には左様お説き下されてあるも、この際世間の機嫌を存するばかりであります」

と申上げたら、聖人ば坐を正されて激しく

「設い源空を死刑に行わると雖も、更に變すべからず、設いそのために殺されても、この念仏は、このして見よう無き源空を助けるとの專修念仏なれば、とどむべからず」

うが、この念仏のお慈悲ましまさずしては、自分如きが救わるる道無き唯一絶対の一道なのである。諸天善神もこの一道を護り給うというこの一道なのである。この一道に妨げをなす者は、守護の諸天の冥職を蒙ると、法然聖人が仰せられた程のこの一道なのである。又親鸞聖人には、この南無阿弥陀仏のお慈悲を頂くと、十方無量の諸仏が、百重千重圍繞して、その者を喜び護り給う、というお言葉もあります。

その唯一絶対の一道は、何もこれを我々わが宗尊しで言うのではない。この浅聞しき、して見ようなき、何れの行も及び難き、五逆十惡の私を、飽くまで見捨て給わぬ一道は、この一道を外にして、他に二あることなきからである。で法然聖人が、ここを深く立ち入りてお示し下されたが聖人の專修念仏の御化導なのであります。

そこで譬えて言へば、ここに梨もあり林檎もあり、果物には種々の種類がある。斯く色々な果物は多いけれども、栗にしく果物はない。坐禅の林檎、戒行の梨はあれども、南無阿弥陀仏の栗の味にはしかぬ。故に「外のものではない。もう唯一の栗である故この栗を喰え、く」とお示し下されたのが、法然聖人の專修念仏の御教化なのである。それでみながその御教化通り「その唯一の有難い栗である」と味いて頂けばよいのであるけれども、処がここで



多くの人は、あの赤い林檎の色彩の無き、この醜き針の毬ある栗となり、毬や形のみにくき事に目を着けるからいかぬのである。

多くの人がここで、法然聖人のお教え下さる念仏は「坐禅でなく、戒行でなく、唯念仏である。念仏とは南無阿弥陀仏々々と口に念仏を称えることである。だから法然聖人の念仏は、南無阿弥陀仏々々と称えることである。」と取るから、栗の有難い処が味わえなくなるのである。「この南無阿弥陀仏は、親が態々自分のためにこさえて下された手織り故、外の着物は着てならぬのである。この一枚の親の手織りを着んならぬのである」と着るから、そのわざわざ自分のためにこさえて下された親のまことは脱けてしまい「親が着よと言うから着る」となるのである。それでは念仏の意味は全く無くなつて了うのであります。

そこで、ここが法然聖人より親鸞聖人にゆく「移り目」であります。法然聖人の御弟子三百八十余人のお方は、皆この法然聖人の専修念仏の御教化をお聞きなされたのである。

前々席に申す如く、此の専修念仏の御示しは、法然聖人『選択集』の御教化の骨子故『選択集』を読まぬ方は無く、『選択集』の御教化を聞かれぬ人は一人も無かつたのである。

故にその一方には心の底に「親の手織りも結構なれども、すでにある着物は着てもよからう。今迄、天台、真言、にある着物を着ても悪いことあるまい」となる。

「聖人の仰せは、念仏ばかりということなれども、外のこと雑じえてしたとて何も悪い事するのではない、故に南無阿弥陀仏を称えつつ、外の善きことしたとて差し支えはあるまい」という事になり、遂に、専修念仏々々と口には言いつつも、戒行を持ち、観念を修しつつ念仏する者が出来、最後には、念仏しながらも諸行を併せ論じ、「念仏は主なるも出来る時は慈善をするのじや。功德を修するのじや」形に親の手織り着ながら、心に他人の着物を羨むやり方で、南無阿弥陀仏、々々と念仏称えながら、心が綺麗になりたいたと、定散心にて念仏する者が出来るようになり、又は「俺は親の手織りを着ているぞ」と、親が下された質朴なる手織りを着るのを、着る者の誇りとするに至り、遂には「我は念仏行者である念仏信者である」と、口に南無阿弥陀仏を称えるのが、何時の間にやら自分の信仰を銜うようになり、肝腎の手織りを選んで仕立てて下された親の慈悲は何処へやら行つて了い、折角の専修念仏の御教化の御真意はいつの間にか碎かれ、所謂「専修専念の人は甚だ稀なり」となつたのであります。

〔未完〕

る。然るに聞きながら、真に法然聖人の仰せを聞き取られた方は『御伝鈔』の信行両座の処に、信の坐につかれた五六輩の人に過ぎなかつたのである。

それは何故であるか「これは親のこさえて下された手織り故、この手織を着るんだ」と、力んで着る事に皆なつて居たのである。力んで着るの故、心から着ては居らぬのである。

「念仏は阿弥陀仏の本願の行である。だから念仏を称えるのだ」となると、「親は外の着物を着るのじや無い、親がこさえた手織りを着るのじや」と言つて下さる故と、無理に親に柔順にして、親の手織りを着て居るのであるけれども、心で何で外のを着てならぬのやら、親の手織りがそれ程有難いのやら、更に訳が分からぬのである。即ちその証拠には、形に手織を頂き、口に念仏しながらも、心に「もつと綺麗な心になりたい」、「こんな心では仕ようが無い」などと、形に親の手織りを着ながらも、心に他人の着物を羨む心がある。形に手織りを着ながらも、心に他の着物を着たいという思いがある。でこれを親鸞聖人は、専修雑心とお示し下された。即ち形に親の手織りを着て居ても、心が外の着物を着て居るのである。否たとい心で着て居ても「親の下された着物を着んならん」と、遂に自分の心でこさえて、無理に努めて着て居るのである。

### 聖徳太子の余光を景仰し奉る

姉崎 正治

日のいずる国にまかさついでましぬ きよくあかるく  
世をてらすべく  
ひむがしにますてりそめてよもよすみ あまねく照らす  
す日のひかり見よ  
あめの戸をひらきて皇子のみせましし みおやのひかり  
りあおげもるとも  
いにしへのひじりの法にそいてこそ あめつちの道ひ  
とにかよわめ  
法のはな日のもとの日にさきいでて くぬちにたえの  
かおりただよう  
国つちはのりのしみずじうるおいて しげるたみくさ  
花のとりにどり  
よるすみな色とりどりにてりはえて やどすひかりも  
もとはひとつの  
かくれにしみかをとしたう心こそ とわの光にやがて  
かよわめ  
人の世はひるとよるとをわかてども ひかりのものは  
とこしえのひる

昭和十八年 十月四日、秋風清涼の日。



歎異鈔三章に就いて

花田正夫

私共が歎異鈔を拜読して、最初から強く心をうたれるのが、この第三章であります。そして色々と考えさせられるのもこの章であります。

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」

とありますが、たとえますと、大きなレンズで太陽の光線を一点に集中して、その焦点をあてると、如何なるものも焼きつくし、熔かしてしまうに似て、弥陀仏の尽十方無碍の光明を一点にあつめて、如何なる悪人悪人も、その煩惱の薪木を焼きつくして、成仏せしめすばやまじという、烈々たる気迫を覚えるのは私一人ではありませんまい。この大光明にあう時、自らの善をほこる者には、その慢心を根こそぎ打ち砕かれる大鉄鎚であり、悪にならずで卑下慢に墮する者には、その卑屈の泥沼から引き上げられる大德音であります。

さて、ここで善人、悪人とありますことについて一考いたしましょう。私はまず、本鈔の末にあります聖人の仰せ「善悪の二つ総じてもて存知せざるなり。そのゆえは如

れたのであります。

すると「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」などの一句は、聖人が申されるはずがないのであります。それは口伝鈔にありますように、黒谷の先徳、法然上人からの相承であります。

ことに醍醐本の法然上人伝に「善人尚もつて往生す、況んや悪人をやの事、口伝これあり」とありますところからも、そのことが明らかであります。

次に法然上人の常の仰せの中に、

「我は烏帽子もきぬ法然房なり。黒白を知らぬ童子の如く、是非も知らぬ無智の者なり云々」

とあります。

すると、法然上人のこの相承の源をたずねますと、上人が「偏ひととせに善導に依る」と随喜せられた善導大師の指南にかえるのであります。

善導大師は、観經を説破されました、凡夫往生の大道を世に公開して下されたのであります。その御釈の中に、凡夫を三種に分けていられます。上品じょうほんの人とは、凡夫にして大乘仏教を学ぶ者、中品ちゆうほんとは、小乗仏教や世間善を行ずる凡夫で、善縁に遭うた善凡夫であります。下品げほんとは煩惱具足の凡夫が五濁の世にあうて、あらゆる悪をおかす者で

来の御ところに、よしとおほしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきを知りたるにてもあらめ、如来のあしとおほしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめ、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに云々」

を思い出します。これはまた聖徳太子の「共に是れ凡夫のみ、是非のことわりなんぞよく定むべき」「世間虚假のおこころにも通じるものであります。

また聖人の八十八歳の御筆になる自然法爾章に

「よしあしの文字をもしらぬ人はみな

まことのおこころなりけるを

善悪の字しりがおに大そらごとのかたちなり

是非しらず邪正もわかぬこの身なり

小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり」

とありますのも思い合せられます。して見れば聖人は、「是非知らず、邪正もわかぬこの身」と常に述懐していら

悪凡夫と呼ばれるのであります。この善悪の凡夫をもれなく御救済下さる本願ではありますが、この中でも悪凡夫の臨終におよんで善知識があらわれて、直ちに念仏を勧めて往生せしめられているのであります。これこそ弥陀仏の大悲が、ことに悪人を悲憫され、悪人成仏を目ざしていられることを知らされるのであります。

さてこの善導大師も御自らは、

「我等ごとき愚痴の身は、曠劫よりこのかた流転せり」

「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫云々」

と告白していられて、この上記御釈も、太陽の光をうけて太陽を仰ぐように、仏心そのままを頂かれての無我な讃仰であります。

親鸞聖人は法然上人に、法然上人は善導大師に、善導大師は、釈尊の本意を頂かれて、弥陀の大悲そのままに

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」

と仰せられたのであります。

聖人は、

「煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみ給いて、願をおこし給う



本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり云々」と、御自身の上に、この德音を聞きとられていられるのであります。

ここの「他力をたのみたてまつる悪人」とは「他力をたのみたてまつりて、悪人が悪人とわかつたところが正しくたすかる因である」と近角先生が身読していられます。

「私共は自分を立派なダイヤの宝石のように思いこんでい

## 堂の鈴

(十二)

るが、仏様の真実の光に照らし出されると、ガラスの偽せ玉にすぎなかつたと知らされる」とも先生は述べて居られます。

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」の如来聖人の德音を聞いて、自分では何か出来る、立派な者とうぬぼれていたまんまが、仏の御目には、十悪五逆の悪人であつたと知らされ「他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと信知せしめられるのであります。

佐藤 強三郎

## 手塚の家

或冬の日、一郎の友人手塚雄三が訪ねて来た。雄三は三男坊でおとなしい人である。

雄三「今度、会社へ辞表を出したのだが、何処か良い勤め口が有りませんか」と沈んで頼む。

一郎「ナニ、突然そんな事。君は良くやつて居て、部下三、四十人も使つていると言うじやないか。どうしたのだ」

雄三「それは、四十人程部下は居る。係長心得たがね。前には、自分の言い分を通したのだから、今度は自分の責任を取つて、会社を罷めよう、と思う」

一郎「それは大変だ。一体どうしたのだ」と心配して聞こうとするが、彼は詳しく話したがらぬ。

一郎は手塚の家を訪ねて、兄に長々と聞いた。手塚は父が早く死んで、母と兄と妹と暮して居る。

手塚の兄「弟は近頃駄目です。折角工業大学を卒業して、

土地の製油会社へ入り、会社の受けも良かったのです。それが、昨年暮、部下の一人が、会社の下請と、ぐるになつて、会社の品をごまかしたのです。その職場でも、皆が、其奴の首を切れ、と言つたのです。会社の工場長もほぼそう思つて居たらしいのです。弟は係長が欠員中で、係長心得たつたのです。そこで弟がその悪い部下をこばつて、……首を切るのはやめてくれ、俺が責任をもつて鍛え直して見せる、……と変な所へ力瘤を入れて張り出したのです。血氣盛りの、学校を出たばかりの者で、しかも四十人もの上役になつたと来ているのです。から、親分気取りにでもなつたのでしょうか。つい我を通して、その悪い奴を助けたのです。その時は良かったのですが、半年も経たぬ内に、其奴がまた会社の金を使ひ込んだのです。それは大した事では無く、表沙汰にならぬ内に、其男の実家で金を出して綺麗に弁償してしまつたのですから、一時流用の様な形で、会社は何の損害も受けなかつたのです。それが、いつの間にか、誰言うもなく会社全体に知れたのです。金額も大した事ではなく、会社に損害をかけたのでもないのですから、皆が黙殺していたのです。……弟が以前に、悪い奴をかばい過ぎたのに、皆が多少反抗気分分、煙つたがつていたものだから、弟だけには、人が知らせなかつたらしいので

す。……大分後になつてからやつと知つた弟は大変怒り出し、とうとう悪い奴の証拠を洗いざらい集めて、辞表を出させてしまつたのです。……

それはまあ、それとして、数日経つと、今度、弟は自分でも辞表を出してしまつたのです。誰も知らぬ間に、それを聞いて、私は驚き、工場へ行き、係りの人々、課長、工場長さんと、それぞれ関係の筋をたどつて、会社の御意向を伺つたのです。

所が、皆さんが言われるには八弟さんが、考え過ぎているので、誰も辞表など受付ける様な気持は無いVとのことです。そして課長さんなどは——どうかして辞意をひるがえさせ様と、色々御心配下さつたさうですが、弟がきかずに、課長さんの不在の時、机の上に又辞表を置いて、黙つて帰つた。……と云つて居るのです。

母も何度か会社へ足を運んで行きました。課長さんは母と一緒になつて、何とかして、弟の考を変えさせようと手をつくして下さつたのですが駄目でした。しまいには、弟は母に……私の辞表を会社から貰ひ下げて来て、また出します……と云つて居るのです。本当に困ります」と兄は歎息をついた。

その後、一郎は、わざ／＼手塚を訪ねて、辞表を貰ひ下げて来るようにと、色々／＼めて見たが、本人雄三は、ハ



イとは言わない。

一郎「君は会社をやめて、どうするのか。こんなに不景気で財界は困乱している時に、良い口など滅多にあるものでない。金でも貯めて居るのか」

雄三「会社へ入つてまだ五年位だから金はない。失業保険でも貰つて職を探すよ。何とかなるだろう」

一郎「そんなに甘く、世の中を見ているのか。君は工業大学を卒業して、その年に今の会社へ就職したのだ。あの会社は一流の優良会社でないか。やめた君がまた別の会社へ入つても、五年もやらなければ、今の位置には付かぬだろう。もし職が無かつたらどうするのか」

雄三「男だもの、日雇に頼まれても、電気職工に行くとも、何でもやるさ。やれるよ」

一郎「君にそれがやれるか。やつても長く続かんよ。もし本当にやれるならそれでも良い。然しそんな考では再起どころか、しまいに自滅するだろう」

雄三「馬鹿にするな。もう、いい」とりきみかえる。一郎は仕方なく淋しく帰つた。

一郎は考えあぐんで、信哉に相談した。

信哉「初め部下をかばい過ぎて、他人の反感を買つたのも彼の自惚れから出た単純な義狭心の八我Vですね。後で

強いて辞表を出させたのも義狭心が裏切られた憤慨からの八我Vですね。

悪いことは、決して赦すべきではないが、神や仏でない人間ですから、常識ある大勢の意見に従うのも大切なことです。自分が本気でやれば、人を焼直すことも出来ると思つて過信するのは八我Vが強すぎるのですね。おのれを知らぬのです。

家族の同情を受入れず、会社側の理解ある取扱にも耳をかきない態度は、一面自我を通し過ぎると同時に、世の中を甘く見ている安っぽい八我Vであると思つて。

II その様な八我Vをたたき潰さなければ手塚君は、一生生涯浮ばれぬでしょう。

八我Vのために身を滅ぼすでしょうII

又この時代に、大会社の係長心得までやつた人が、日雇でもやりますなんて、駄々子の様で、そんな気持では、三日坊主で終るだろう。それは心の底に——困れば何とかしてくれるだろう——という、不真面目な考があるのではないでしょう。

人によつては、職を変つても立派にやつたものもある。又、何が幸になるかは、みだりに予断は出来ない。

然し大学を出て係長までやつた人が、失業保険でやるの、日雇になるの、と軽々しく言つているなど、面白く

て語り出した。

一郎「信哉さんから聞いたのを、以前に、お小夜に一つやつて見ました。妻お藤に対して真実を徹すために。……今度は手塚君に対する友情からやつて見ましょう」

一郎は手塚の家を訪ねた。母は一人でいた。一郎を見るにすぐ語り出した。

雄三の母「雄三は、会社が辞表を受理してくれないなど、ブツブツ言いながら通動しています。勿体ないことを知らぬのです」

一郎「お母さん、一つ大いに忸いて頂きたいのです。雄三さんの辞表を貰い下げに、会社へまた行つて下さい」

母「私も兄も行つたのですが、本人がその気にならず、何度も貰い返したのですが、また本人が出すのです。私共は本当に会社へ顔向けも出来ず、心配して困つています。親が早く亡くなつたので、世の中のことをよく教えてくれる者が無かつた為でしょうか。女親では世の中の節々、角々がよく分かりませんので、力の入れ所がわかりませんので困つています」としよんぼりしている。

一郎「それじゃ雄三君が野垂死する様になつてもおかまいならぬのですか。私は今日は絶交する様にならうとも言うだけは言う積りで来たのです。

ない。一体その人は、乞食にまでなりさがつても、生き

抜く程の覚悟があるでしょうか。太つ腹でしょうか。

こんな事で、辞表を出すなんて、今後、又どんな会社に勤めても、又こんなことでつぶれてしまふかも知れぬ。

会社側が同情して、辞表を撤回させようとすゝめても、本人が何回も出せば、他人は、そう何度も、会社へ留保を頼み込むことは出来ない。それだけに、親だけは、会社に対してどんな責任をも負い、どこまでも、何度でも辞表を貰い下げに行くことが出来る」

一郎「それでは、どうすれば良いでしょう」

信哉「お母さんから、一つ、本気になつてやつて貰つたらどうでしょう。雄三さんが、浅はかな八我Vのために、自滅するのを、母は見ていらぬから、辞表は何度でも貰い下げに行く、と、雄三君にお母さんから、改めて強く言つて貰うのですね。

子が失散して潰れてから、人に笑われる程なら、失敗しない前に、親が、人に笑われ様が、会社に顔向けが出来なからうが、一途に子のために、辞表を出すのを止めさせる様に御心配下さることが出来ないでしょうか」

一郎は一言も聞きもらすまいと、全身を耳にして傾聴した。

一郎「それは良い、一つやつて見ましょう」とニコニコし



私は今度の事件は、手塚君の一生の運命を決する試金石だと思つて居るのです。工業大学を優秀なる成績で出て学問はあるが、世間の苦勞が足らぬ。同級の私が言うなど失礼ですが、聞けば本人が会社を罷めれば大変お困りとのこと。お父さんの居ないお宅としては無理ありません。本人は良い気になつて軽卒に辞表を出しましたがその後すぐに良い職業なんて、オインレと見付かるものでないでしょう。ましてや年々同級生は昇給して行くのに、自分だけぐずぐずしてれば、しまいに自暴自棄にならぬとも限りませんからね。

そうかといつて、勤めをやめて急に商売をやるうとして、その資本が仲々大変でしょう。

今度の話は、会社でも、御家庭でも、同僚も、会社をやるなど、皆が心から勧めて居るのです。それを振り切つて、どうしても罷めるなんて頑張るのは、それこそインテリの潔癖すぎる弱点でないでしょうか。本人は良い人ですがね。

お母さん、手塚君が、一生安価な△我△を張つて、その△我△で倒れてもかまわんですか。他人は、辞表を貰い下げる事は、際限もなく出来ませんが、母親ならば、何度だつて行けるでしょう。これが親の特権ですよ。今、雄三君を浮び上がらせるも、沈ませるも、お母さん

門でその女事務員は「手塚さんのお母さんでいらつしやいますか。どうぞ私と御一緒においで下さい」と案内した。

道々「私は同じ課の者で、いつも手塚さんにお世話になつて居るので御座います」とよるこんで課長の所へ案内してくれた。

雄三の母「度々参りまして失礼いたします。いつもお世話様になりまして、おわびの申しようも御座いませぬ。今日は、またあの子の辞表を頂きに参りました。私が弱すぎたのでした。会社の方でも身にあまる御厚意を載せて居りますので、私は石にかじりついても本人に納得させる積りで御座います。……」

実は恥しながら、あの子のお友達の誠意に押し出されて参りましたわけで御座います。会社に重々、御迷惑をおかけして、本当に相済みませぬ。父は亡く、長男は早く死にましたので、もしかあの子が会社をやめ、そのためにぐれ出したらどうしようかと、あの子の将来を考えると居ても立つても居られませぬ。こんなことであの子が潰れたりしては……」

とお願ひすると、課長さんは、すら／＼と気持よく辞表を返しながらい、課長さんへ勤める様によく話してやつて下さい」と親切

のはからい一つにかかつて居る、大切な時期でないかと私は思うのです。一つ大いにやつて見て下さい」

一郎が話をすゝめるにつれて、母は次第／＼に膝を乗り出し、眼を見張り、口を結び、手を握つて、一句一句きいてうなずいた。眼は光つて来た。

母「わかりました。私は会社へ行つて、雄三の辞表を貰い下げて来ます。貰つて来なければ親として生き甲斐がありません。子供の△安△つぽい△我△をぶちこわしてやりませぬ。若い者が失敗することはいくらもあることです。いくたび失敗しても、考え直して、どこまでもくじけず、正道を行かなければなりません。よく育て導いて行くのが、親の役目です。私はどこまでもやりませぬ」

一郎は母のこの言葉を聞いて驚いた。この意気込みならやれるだろうと嬉しく思つた。

一郎「お母さん、しつかりやつて下さい。よろしく頼みます」

母「ほんとに、ありがたう御座いました。今頃やつと目がさめました。元氣が出ました」と堅く口を結んで眼を輝かせた。

翌日母は会社の門衛の所へ出た。いつものように門衛から雄三の課へ電話をかけてくれたが、今日は雄三が留守だと云つて、同じ課の女事務員を迎えによこしてくれた。

に言つてくれた。

母「今後何卒よろしくお願ひ申す」と、辞表をおし頂いて眼頭をうるませながら何度も頭を下げた。

帰りにもさつきの女事務員が送つてくれたから「雄三さんは氣が弱い方だから、お母さんも御心配で御座いますよ。いい方で御座いますのに、どうぞ元氣をつけてあげて下さい」などしきりに話しかけるのである。

「貴女の御名前は」と聞けば「樓子と申します」と答えた。優しい、美しい娘と思つた。

母は会社の門を出てから途々一人で考えた。△このことが成功せず、そのために子供の将来に氣の毒なことが出て来たらどうしよう。あの子の隣れな生涯を想像するとき、居たたまらない氣がする。そうだ、これが出来ない位なら、生甲斐がない。どうしても考え直させなければ……△と。そしてその日のうちに一郎に報告した。

それから三日目にお母さんが一郎を訪ねて

母「あれから、毎日びく／＼していましたが、まだ出しませぬ。今度は辞表を出さぬ様な氣がします。もし出せば私は命がけて、何度でも貰い下げに行くつもりです」と涙ぐんで語り続けた。

母「子供の一生のことを心配すれば、年寄りの私など、幾



日寝なくとも、食わなくとも、恥も外聞もかまいません。親馬鹿と言われても、子供のためなら忍びます」と真剣であつた。

あれから四・五日の後、また一郎を訪ねて母「ありがたう御座います。雄三はもう辞表は出さぬと言つてくれました。課長さんも喜んで下さいました。あの子もきまりが悪いでしょうが、良く辛抱して、毎朝元氣よく出勤しています。

度々△我△Vを通して来て、自分の面目丸潰れになつたのです。それなのに、黙々として会社へ行く子供の心根を察して見れば、涙が止まりません。よく辛抱して勤めてくれています」と、とぼろぼろと泣いた。

それを聞いて、一郎は心に思つた△慈母が、子供の短慮や、失敗に対して、いつも何処までも見捨てず、呆れず戻して行く。親の慈愛によつてこそ、その子供は正しく、くじけずに育つて行くのだ△と、尊く感じた。

一郎は又、この母が、何物をも恐れず、何等の名利をも求めず、何等の返報をも望まず、ひたすら子供の将来の幸福を願う様子を見て、これこそ地上の最上の宝である。どんな宝も、これにまさるものはないだろうと眼頭があつくなつて、自然にあふれる涙を止めることが出来ない。△慈愛の力の、何と強いことか！△とつく／＼感じた。

一方、雄三も考えた。△父なき後、一人で二人分やらねばならぬ母の苦勞を察するにつけても、あの時軽卒に辞表を出していたらその後就職に困り変屈な男になり下つていたかも知れぬ。浅はかな△我△Vを張つて、広い世界を狭く暮し、遂には△我△Vのために潰れて居たら大變であつた。一生を台なしにしたかも知れぬとゾツとした。

雄三は又思う△一郎が自分のために苦言を呈し、仮令、喧嘩になろうと、絶交になろうと、どこまでも自分の将来の幸福を願つて、誠意をもつて押し付けてくれた豪力には恐れ入つた。友情とはこんな有難いものであるうか△と感じ入つた。

手塚の母は一郎と共に信哉を訪ね

母「雄三のために色々御心配下さいますして有難う御座います。毎日会社に通勤して居ります」

一郎「お母さんが真剣にやつて下さつたので雄三君も降参しました」

信哉「それは大變結構なことです。然し今度のこととは……聖道の慈悲……というもので御座いましょう。これだけでは、どうしても間に合はぬことが世にありますからどうぞ氣をつけて下さい。その時は一郎さんに御相談下さい……」

## 一 道 会 の 記

(続)

榊 原 徳 草

次は花田先生のお話が続いた。

花田先生は大正十一年に第六高等学校に入学されて、初めて池山先生に遭われた。然し先生がどんな方であるかは少しも知らない。最初に先生が担任教授としての挨拶をされた時、

「御入学お芽出度う。今日から君方を紳士として遇する、別に注意することも無いが、左側通行のことについて巡查さんと協調するようにとの申出があつたので伝えておく。それから、君方は前途洋々として希望に満ちているが、人生の行路、何時、どんなことがおこるかも知れぬが、思いあまつた時は訪ねて来るように……」

そんな話をされてスツと教室を出て行かれた。その時、さすが高等学校には偉い先生が居るものだなあ、と思つた。然し池山先生が篤信の方であるとも知らず、キリスト教を求め、一灯園で托鉢の真似事をやり、何れも行き詰つて途方にくれていた時、叔父から歎異鈔を勧められ、それと共に池山先生こそ、歎異鈔の日本の体読者でいられると教えられて、先生の教をうけて御往生に至るまでお導きをう

けた。岡山時代の思出について、第一に、私の存在ということについて先生にたずねると、

「線路上で子供が無心に遊んでいて、汽車が轟々と接近しているとする。それを見たら君はどうするかね。ほつておけないだろう。誰からも頼まれなくても、御礼を云われなくても。今我々はこの子供と同じではないか。無常の汽車は接近しているが平氣でいる。これを照覽される仏は、求めず、頼まぬ前から救いの声と手をのべていられる云々」

と答えられた、その先生がそのまゝ私の権化として心に映つて、返す言葉もなかつたそうである。

又岡山時代の先生についての思い出の中には、例の先生の犬とり事件、愛犬が犬捕りにとられたのを警察までついていつて遂に貰い受けられたあのお話。その時は先生のドイッ語の試験の時間だつたが先生が来られないので試験は駄目になつてしまつた。「私が放つておいたのが悪かつた」この犬の姿こそ私の姿である」とはその時の先生の



御述べである。

又ある学友が歎異鈔の「親鸞一人がためなりけり」の一句が判らぬと申したとき、先生は丁度御次男が病氣を患いていられその看病をされていた。「親と子は二つであつて一つである、一つであつて二つである。如来もまたその通りで、病める私一人のために付きつめの御苦勞である」と説かれ、その時の御自身の述べ懐として

久遠このかた子ゆえの廻向

わたしひとりをおもひ。

衆生可愛や生死の海に

己が罪から浮き沈み。

この二句は、その時の御味いから出たのであつた。それは教室の窓から外を向いてお念仏しておられる先生の胸に、如来の大悲が映つてこの句になつたとのことである。

岡山での親鸞会に学期始め頃は六十人も参会者が居つたが、三学期の終りになると五人に減つた。あまりすくないので恐縮していると先生は「今年は豊年である、一ヶ年通じて五人聞いたら豊年だよ。君等は前途洋々である、聖人のお言葉は六ヶ敷いが、聞くだけ聞いてくれ、耳だけ借してくれ、竹の子にキズをつけるようなもの、年を経るにつれてこの痕跡も大きくあらわれる、種々な縁に触れることでこの聖人の言葉が身につけてくる。」と仰言つた。

もので、この善巧方便によつて吾々は常に育てられていく。

私は山形高校から東大へ出願したが、止めて京大の法学部へ入学した、法科へ入つたのは伯父の経済的援助に原因があつたが、自分の性質に合わない、法科を出て文科へ再入学したがそこで花田先生に遭つた、これが御縁であつた、人間は苦の中に居る、暗の中に居る、私は寺の生れたつたので生れながら聖人の教への中に在つた。花田先生のような生い立ちではない。各々人間は違つた生涯をもつて生れ出ている、皆違ふがそれぞれに如来の善巧方便もまた違つて働いている。白井先生は今日のお話を松大の学生を主として話されると仰言つたが、学生諸君の夫々の一人々々に如来の善巧方便が働いていることを思つて頂きたい。

右のように松本先生は愛児を育てるように、松大仏青の学生達に今日の御縁をどうかしてのちの宝としてほしい念で満ち／＼していた、私は先生のこゝ数日の姿を見、今日のお話を承つて大悲なる教と如来に濃かれた人の姿を見る思いであつた。

次で東先生の述べ懐があつた。先生は奥様を伴われての参会であり、共々に師の念仏に遭われるお姿であつた。咄々と低声に表現の虚飾もなく、ひとなき室での独り言のよう

又、六高を去つて先生は甲南高校へ赴任される時、吾々を夕食会に呼んで下さつた。その時、「私は甲南高校へ行くことになつた、これもさるべき業縁の催しの致す所である。これからもどうなつてゆくのかわからない、然しこれからどんなになつていつても私はその姿のそこに護つて下さる。諸君も然りである、私はその時の、その姿のそこに護つて下さる。」このお別れの夕食会を最後に岡山から先生は去られた。

花田先生は今回は先生の岡山時代の思い出だけを右のように話された。

次に松本先生のお話があつた。

今年の会には松山大学の仏教青年会の学生と二十六日から今日までこちらに來ている。

池山先生にはその御晩年の十年間をお導き頂いた。先生には念仏の導き方に二つあつた、その一つは今度の慈光誌記念号にあるように「しみこみ」で、もう一つは先生の言葉で云へば「ふみきり」である。私はこの二つをまとめてみたいと思つていた。念仏に回心するには単生型と復生型とがある、単生型は所謂頓であり今迄反対方向にあつた者が立所に他力撰生の深旨に「頓入」する型であり、復生型は恰も草花に水を遣り／＼して「しみこみ」から信を頂く、所謂「漸入」の型である。何れにせよ仏の善巧方便による

に師の徳を話されるのであつた。親鸞会に入り聖鸞寮に入ら道されたこと、昭和十二、三年頃から先生は病弱となられたがその間執筆に講演に無理を重ねられたこと、川畑兄等と常に蓮花谷のお宅へ通いつづけたこと、身近に先生に親近させて頂いたこと、外国へ行つて知名の人々に会うたが先生のような人格には一人も遭えなかつたこと、私は先生に遭つた幸せを思う、今後どんな人格に会うても先生のようなお方に会うことはないと思う。と噛みしめるように咄々と語られるのであつた。

向島先生の述べ懐は、私は先生の晩年の徳風に遭つた一人だが、先生は真の念仏者であると同時に独逸的色彩が念仏の表現に方便として常に出ているのでそれが従来の念仏者と異つた形で人々を引きつける面があつた。いつか東先生が池山先生は真のヒューマニストだといわれたことを思う先生は念仏される姿こそ真実の人間そのものである。と先生の新鮮な感覚によつて醸し出される念仏のことから、此頃、竜谷大学の研究部から論文をたのまれたので「ニーチエのニヒリズムについて」書いたが、これは池山先生がよくニーチエを引いてお念仏を話されたこと、若い学徒にはよい方便と思ひ私も試みた、ニーチエは宗教否定論者だが先生も他山の石としてよく引用された、それは仏教的色彩が非常に濃いからである。立場が無我的であり、禪的であ



り自己否定的、自我破摧的であり、こゝを先生も見られたのではないかと思う。若い者に念仏を伝える場合、お念仏という名号はハイデッガーが「言葉は存在の家」といつているように「名号は如来の家」と云えぬか、現れているものは存在せるものであり名号こそ真の存在があり、その中に吾々も住むのである。池山先生が御臨終の時に「えらいこつちやよ、お念仏だけが残る」と言ひ残されたこの如来の住んでいるお念仏、たとえ空念仏であつても真の存在である如来の家、名号には如来が住んで居る。

右のようなことを話されたが、向島先生のごこのお話の因縁とでもいうものには、御子息へ念仏を勧める切なる願いが秘められているのを私に漏らして下さつたことを記させて頂き、若者と念仏との言葉の裏の真実をお知らせしたい。

渡辺範介先生のお話はこうであつた。

岡山六高に明治三十九年に池山先生は赴任され、その年に最初の生徒として私は入学した、先生は三十才位であられた、それ以後今日私は七十六才だが池山先生の御縁になつてゐる。今日も苔寺からこゝまで歩いてくるうち色々と思ひ出が湧き、先生よりも長生きした今日感無量である。六高の学生時代は信仰などより運動の方が主であつた。三部の医科だつたが監督官として先生の指導下に入つ

念仏を唱え私なりに先生の御縁となつてゐる、信も何もないが斯うして生涯先生によつて護られてゐる私である。

次に石川教授のお話があつた。

私は岡山六高時代、池山先生のお宅の近くに居つた。兄も六高の三部におつたが私は進学の決定が仲々つかかなかつたが母が進学の方向を決定してくれ六高に入つた、その母が亡くなつた時非常に悲しんだがその時法学通論の教授岡本一郎先生にそれを訴えたら、池山教授に会えと言われた、先生にお会いして悲しみを訴えると先生は歎異鈔を説むことを教えられた。私の母は金沢の出で信仰の厚い母だつた、そのうちに力を得て立上つた、或時海水浴にいつてゐると電報が来た、池山先生の奥様が胃癌と宣告されて先生のうち最後のお別れの食事会への招待でその時近角常観先生のお話を伺い、先生と奥様の死を前にしたとは思えぬお姿にびつくりした。私は京大教授となり経済学概論の講義をしてゐた頃、或る時学生が待つてゐる、それが池山先生の御子息の信也君だつた。蓮花谷の先生のお宅へ参ることになつた、これ皆、弥陀の慈悲による導きである。

学問の世界、特に私は経済学をやつてゐる、現在のキニバ事件にみるように資本主義と社会主義、共産主義との対立抗争となつてゐるが、資本主義経済学も社会主義のそ

た。先生のお宅へも伺い、夜分にも伺つたが、別に信仰の話などされない、こちらも求めることもない、然し「先生は変つた方だ」と思つた。やかましく云わない、超然としてゐる、変つた先生だと思つてゐた。学友に寺院出身者があり奨められて千輪淨海師の寺にお願ひして先生にお話を伺つたこともあつた。卒業後は御縁がなかつたが昭和の初めに甲南高校へ先生が来任されたとき自分は御影の分院に居つた。先生の偶居は住吉神社前で学校の住宅だつた。この附近に学友四、五人がおつたので先生をお招きしてお話を伺つたり暮を打つたりした。学友の一人阪大教授になつた谷口君が、先生はあの頃から違ふと思つた、吾々今から思うとその時の先生は仏様のようなだつた、と云つたら先生は其頃私は信仰はなかつたと仰言つていられた。

先生との御縁は深い、京都へ移られた先生から松茸狩に招かれたこともあつた。御子息が急性腎臓炎にかゝられ死なれる時私は伺つた、死なれる時に一人々々に挨拶され女中にも挨拶され、自分では意屈な臨終だと言つておられるのをきいてさすが先生の御子様だと思つたことだつた。

先生の御臨終にも電話で知らされてお会いしたことがある。先生との御縁はまことに深い、自ら信を求めたこともない、これといつて特に信仰のお話も何うでもなく私はおれも何れも対立的立場を離れない、これでは真の経済学でない、これらを超えた「第三経済学」というもの即ち仏教精神からの真の経済学を創るのが私の念願である、現在の世界的危機を救う経済学は私のいう第三経済学の実践にあると信じる。

右のようなお話があつて、それから御自身の仏教探求の経過をのべられ、大学一年の時西田幾太郎先生の哲学から仏教では華嚴経を、又禅では鈴木大拙先生に、その他羽溪了諦先生等に仏教の真精神を求めたこと、結局、信仰では池山先生に仏教の哲学的思想では西田哲学についた、西田哲学ではその最後の論文となつた第七論文「宗教的世観」―場所的哲学―が心を打つた、この宗教哲学と田辺元先生の哲学によつて科学的基礎づけを得て結局歎異鈔によつて生きてゐること。ヨーロッパの宗教は吾々以外に人格神を求めるが仏教は吾々の自覚にある、将来はキリスト教でない仏教が真の宗教として人類を幸福にすることなど情熱をこめて一大講話を展開され、まことに今年の一大会は若い学生対象のこよなき法筵と化した観があつた。

右のお話の終結のようなお話として、親鸞は名号一つに一切をおさめた、仏像、画像は元來がギリシヤ芸術の影響であつてそこに親鸞の生命はない、華嚴・天台の煩悩な思弁を一切しりぞけて念仏一つで一切の相對を包摂しそれら



を活かした親鸞の念仏は、それ以前にない念仏である。吾々がいかにか逃げようとしてもこれを絶対に包容してしまふ。それを知つたとき救済される。念仏と西田禅哲学とは同一境地である、親鸞の鏡の御影々にみる鋭き、厳としたお姿はそれをよく象徴している。私はこの念仏の精神をもつて第三の経済学、それは一方的経済学でなく、世界本位に見る経済学を立てたのである。

このようにお話を結ばれたのであつた。

こゝで暫く休憩となる。この間、或は花田先生の廻りに白井先生の前に久しぶりの拝顔で参々伍々集つて挨拶やら質疑が湧き、今迄の緊張が一時に和らぎ会場は賑やかになるのであつた。

次で再び会を始め、城さんから四年前に名古屋へ花田先生を訪ねた時の思い出から現在の信境を語られ、続いて四国から来られた小川夫人が、奈良女高師時代に浄教寺の無憂華会で池山先生に初めて遭ひ地獄極楽のことを質問したところ先生は笑つて答えて下さらなかつたが、その笑顔が印象的で今以つて忘れられない、先生はきつと赤ン坊のような私は抱いてゆく外ないと思われたに違ひない。今でも先生の抱いて下さることを思うとあの笑顔が見えてくる。

次で江口克夫氏の述懐があつた。

岡山高時代代に花田さんにつれられて池山先生の所へ行

四人の子供が居る、親として大いなる仏の恵みのしみこみ、如来の御用を果しているかどうかという現状を眺めて極めて悲しいことである。自分の到らぬ粗末な家庭を感じることである。子供についてはいろいろ思うのだが、結局は歎異鈔の『この慈悲始紹なし』が身に應えてくる。こういう方向に向いてほしいと思つても、どうにもならぬ。結局仏の御計らいであるのに自分がそれをさえぎつてゐる。そしてお念仏にかえるようなことである。松本先生のお話の中の「ふみきり」、私には鮮かな自覚・転廻がない。鈍重な私であるが勝曼経の『如来の調熟を得て……』の私であることを憶う、いろ／＼と仏に会う道は違ふが、仏の智慧と慈悲と種々なる方便によつて念仏に遭う、これを有難く思う。石川先生のお話で名号一つに尽きることを承つたが仏の御姿を懐かしく仰ぐこと、姿を通じて仏に遭うこともあつてよいのではないか、教えて頂かねばならないことであるが……。

最後に佐々木先生の述懐があつた。

池山先生は晩年京都に居られた、私も京都に住んでいたが御縁がなく目の当りお顔を拝しお声を聞くことはできなかった。しかし御著書により又導かれた人々から先生のどんなお方だつたかを感じることはできる、先生は只の人ではなく普通の人格ではなかつたように感じている。

くようになった、我慢の強い怠け者の私は何時もつまずくばかりであつたが、昭和十一年に心中を花田さんに打明け池山先生の所へ連れていつてもらつた、色々お話をしたり聞かせて頂いた後私は「こんな者でも救われるのですか」と先生に問う、すると「救われますよ」とまことに素直なお顔をして答え「そのうちに、肩代りをして下さる方があるからね」と言われた。

先生の亡くなられた時は田舎に居つた、身体が悪かつたためである。最近身体が弱つてきた、蜂屋師、金子師に法話を聞いておる、身体の方はこゝにおられる城先生に診てもらつてゐる。事業もうまくゆかないで六十才近くなつてしまつたが、友達は君は楽しそうだからだと言ふ。池山先生とは今でも心の取引をさして貰つてゐる、我儘勝手ばかりして怠け者で念仏も忘れるが、しかし生甲斐が感じられる。池山先生を憶うと朗かになる。

次に井上先生のお話が次のように述べられた。

こんど「慈光」の池山先生の「しみこみ」の講演筆記を拝読して親しく先生にお会いする感がある、そして聖人の御本典の中に元照律師の文を引かれた文「耳に聞き、口に唱ふるに無辺の聖徳識神に攬入し云々」が頻りに憶えるのであつた。「しみこみ」の文を拝読して、先生の御家庭の念仏のしみこみを深く感じるが、私の家庭をふりかえると

導かれた方々から受ける感じや御著書から受ける感じは人間的なものを払いのけて純粋な美しいものになつて返つて深い意味があると思われる。私は母を二才で失い母を肉眼では知らないが、話に聞く母は人間的なものが退けられていて真実のまゝの母に遭えるような気がする。池山先生と私との関係もそのようなものであつて、私に於いて現に先生は好き師として生きてゐる、その点、先生のお導きに会つた皆様と親しく又同じお念仏の中にあるものである。

以上本年の一道会の概略を誌し終つたが、先師の遺弟が何れも各界の重要な地位になつておつたりするが、青年時代に身に受けた先師の念仏一つの輝きは年と共に増進して御恩を追慕する情の深厚なるを感佩して、共に会する者の等しく感無量なものがあつた、念仏の威徳広大不思議を讃仰するのであつた。又今年には松山大学仏教青年会等の若き求道者にこよなき法雨であつたことも特に感慨深いことであつた。

(三八、四、五)





# あとがき

本年は鑑直和尚の千二百年祭として、奈良の唐招提寺は青葉と共に賑やかことでありまな  
しよう。

若葉して 御目のしず／＼ぬぐわばや  
と、俳聖芭蕉が御尊像の前にぬかずいた故  
実もしきりに偲ばれる頃となりました。

入唐僧普照の招きを快諾されて、百八十余人を率いて渡航を企てられながら、六度も大難に障えられ、其間に失明されたのに、遂に渡来。聖武上皇は東大寺に迎え、「三宝の奴しと御自身を表白されたことも、和尚の徳香の高さと上皇の教智の深さとあい照応道交された消息でありましよう。

和尚は唐の文化を伝えて下されたのはもとよりであります、和尚自らは、戒師として律を伝えて下されたのであります。それにつきまして思ふのであります、戒律の箇条書きを覚えることは容易でありまして、それは「論語読みの論語知らず」でありますが、ここに心から頭の下る尊い方に遇うと自然に感化されるものであります。その徳の人

にあらうことが、盲亀が浮木にあらうよろこびにたとえられるのであります。青葉若葉の頃、和尚の慈眼を仰ぎ、仏法伝承の恩を謝しまつりましよう。

近角先生の、至心積はすでに頂きました  
今月から、信樂釈と続いて欲生釈を頂いて、教行信証の肝腑を味わせて頂きたいと存じます。

先日三重県のある高校の卒業生と談合しました時、高校の日本歴史の鎌倉時代のところで、歎異抄の第三章が出ていたとき、しかも卒業生の心に刻まれていたのを知り、嬉しい限りでありました。鎌倉時代に新人仏教がおこり、法然、親鸞、道元、日蓮、栄西、解脱、明恵等々、力強い動きがあります、在家仏教として、漁をし、農商に従事し、肉食妻帯のまんま仏道を歩ませて頂けるといふ、日本独特の仏教が開華した、その根元として、悪人正機の第三章が引用されていることでありましよう。近來にないよろこびでありました。

## 御案内

第一、二、三日曜、午後一時半、一道会。  
南区駈上町、一道会館。廿四日午前午後、  
昭和区小椋町教西寺、法話会。

執筆者の住所

新潟市関屋堀割十三

佐藤強三郎

京都市右京区山田開町

榊原 徳草

定価 一部 二十五円(送共)

半年 百五十円(送共)

一年 三百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番